

平成24年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	上海市における日本人児童・生徒の教育の現状と課題 －学校選択・ことば・異文化体験－
------	--

研究代表者

氏名 見世千賀子	所属 国際教育センター	職名 准教授
-------------	----------------	-----------

研究分担者

氏名 菅原 雅枝	所属 国際教育センター	職名 准教授
蔣 旻	東京学芸大学大学院	院生

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

本研究では、上海市を事例に日本人児童生徒の教育の現状と課題を明らかにすることで、今後も日本人の増加が見込まれる中国での海外子女教育のあり方について、検討することを目的とする。現在、上海市は日本人長期滞在者が世界で最も多い都市となっている。これに伴い、上海日本人学校の児童生徒数も急激に増えており、小学部2校舎、中学部1校舎、そして世界初の高等部を併せ持つ、全校児童生徒2,900名以上が在籍する世界1の規模の学校となっている。さらに、上海には、中国教育部から「外籍人員子女学校」の認定を受けたインターナショナルスクール等の学校や、現地校の中に、外国籍の子どものための「国際部」を併設する学校の数がそれぞれ30校近くある。近年は、こうした学校を選択する日本人保護者・児童生徒も増加している。しかし、これらの教育の内実と日本人児童生徒の実際や課題はまだ十分に明らかにされていない。そこで、本研究では、日本人学校、および、日本人児童生徒が多く在籍するインターナショナルスクール、さらには、上海にある日本の塾への訪問調査を通して、上海地域に在住する子どもたちの教育の現状と課題の一端を明らかにした。

日本人学校には、児童生徒数の増加から2校舎が設置されている。上海市西部に位置する虹橋校には、小学部のみ、東部に位置する浦東校には、小学部、中学部、高等部が設置されている。いずれの小学部・中学部においても、国際結婚家庭の子どもの中に、年齢相当の教科の学習についていけるだけの十分な日本語の力のついていない児童生徒が見受けられる。こうした子どもたちへの対応は今後の課題となろう。尖閣諸島問題をめぐり日中関係が難しい状況にある中、平成24年度は、現地校との子ども同士の交流は、中止にせざるを得なかったそうである。しかし、教員同士の交流(相互の授業参観、意見交換等)は、継続して実施されたそうである。また、日本人学校内では、子どもたちは、中国人教師から遊びや制作等を通して、楽しく中国語を学んでいた。現地理解教育や国際理解教育をどのように行っていくかは、継続する課題である。高等部は、現在2学年まで在籍している。高等部の生徒は、中国語の流暢な生徒を中心に活発に、現地の学校の生徒との交流を行っているそうである。目下の課題は、生徒の進路への対応とそれに関連する学校カリキュラムのあり方である。一つには、保護者の帰任によって、日本の高校へ転校する場合、帰国先は全国に渡るため、履修科目等の対応が難しいという点である。また、25年度に最初の卒業生を出すことになるが、生徒の希望や背景が多様であるため、いかにして個々のニーズに合う、指導をしていくかということが課題となっている。塾におけるインタビューでは、数としては多いわけではないが、子どもの小学校以降の進路の多様性がみられた。訪問したインターナショナルスクールには、幼稚部から高等部まで設置されており、日本人は全体の3分の1の割合を占めるといふ。幼稚部では、日本人幼児向けや韓国人向けのクラスも設置されている。また、第二言語としての英語教育のクラスも充実されている等の工夫がみられた。こうしたことが、日本人保護者の学校選択に影響を与えていると考えられる。

今回は、いずれの学校等においても短期間での訪問調査であったため、十分に現状と課題が明らかになったとは言い難い。学校選択、ことば、異文化理解を切り口とした、より深い考察を、今後の課題としたい。

研究成果発表方法

[発表論文名(口頭発表を含む)、氏名、学会誌等名(投稿中・投稿予定・執筆中)を記入する。]

※本経費を用いて、報告書(冊子等)を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

「上海市における日本人児童・生徒の教育の現状と課題」『国際教育評論』(東京学芸大学国際教育センター)投稿予定。